

いにしへの映画つれづれ ② 映画パンフレット漂流記(2)

千葉豹一郎

現在は旧作のパンフレット（以下 パンフ）を専門に扱う古書店などもあり、ネットでも割と簡単に入手できる。一定の市場も形成され相場のようなものもあるようだが、そのルーツは1970年代初頭の映画の聖地、日比谷のど真ん中にあった。「日比谷映画」裏手の東宝ファンタジー・コーナーで、ここから派生していったのではないかと思う。勃興期だけにさまざまな出来事、紆余曲折があり、風変わりというか得体の知れない面々も出入りして、まるで映画の世界のようだった。割と短い間に目当ての貴重な中古パンフをまあ常識的な価格で入手できたのは、ここがあったお陰といえた。中古パンフ

は処分されたりして年々減り、半世紀を経た昨今では絶対数はかなり少なくなっている。時折、ついでの折に中古パンフを扱っている古書店に寄ると実感する。驚くのはその値段だ。数千円は当たり前で、万単位、中には十万単位のものも珍しくない。これでは、とても手が出せない。インフレを勘案しても高過ぎる！後述する一時期のプームが価格を押し上げて、悪しき相場が形成されたのが尾を引いているのだろう。たまたまその渦中にいて、現在に至る変遷もある程度見てきたので、そのリアルな様子述べてみたい。

東宝ファンタジー・コーナーで扱うようになった中古パンフは、最低でも200円

から300円になり、新古品の100円から150円よりかなり高い。もともと値段があってないようなものだから、需要と供給、それと売り手のさじ加減で決まってくる。中古パンフは価格表示もなく、番頭格のOが積んであるパンフを見せながらその場で値を付けて、レシートも出さなかった。少しでも高く売りたいのだろうが、頻繁に出入りしていた20歳前後のコレクター連中が相手では手持ちの金はたかが知れている。あまり吹っかけてそっぽを向かれては元も子もない。そのあたりをうまく見極めて、500円位を上限にしていた。事前の注文は受け付けず、近々入るかもしれないな



「日比谷映画」で公開されたクララ・シューマンの伝記「愛の調べ」。このレイアウトがしばらく続いた。



正月映画として東劇で公開された西部劇の「ダラス」。主演のゲーリー・クーパーだけで題名もない。こちらのレイアウトも定番だった。

映画パンフレット漂流記(2)

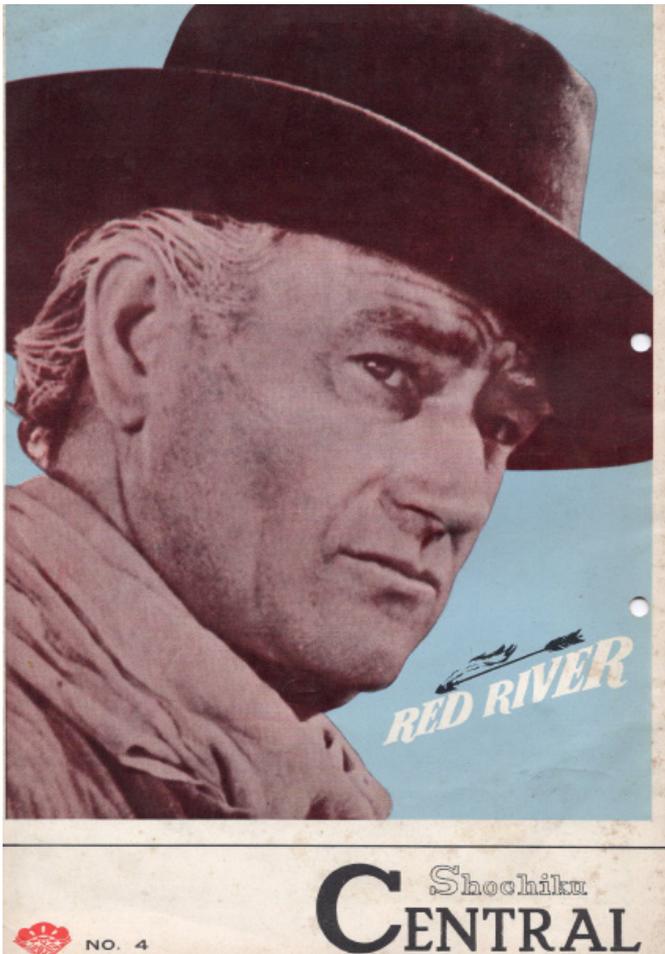
どともったいをつけてあおっていた。いきおい各々がちょくちょく顔を出すようになり、コレクター連中ともよくかち合った。来れば何か買って行くから、なかなか賢いやり方だ。口コミで広まって知ったのか、次第に売りに来る人も現れるようになった。土、日などにコレクター連中が居合わせると大変だった。Oは少し離れた場所で売り手と価格交渉するのが常で、みんな固唾をのんで様子を見守った。だんだん口数も少なくなると、獲物を狙う獣のような目つきになってくる。Oが戻ってくると、それこそ取り合いだった。2、3人が同時に1冊のパンフを掴んでくちやくちやになることもあった。それでケンカに発展するようなことはなかったが、情報交換などをしながらも、互いに腹の探り合いをしているような何ともいえない独特の雰囲気か漂っていた。特にKという男は感じも良く物腰も丁寧だった反面、異

常なほどしつこかった。根負けして連絡先を交換したのが失敗で、最寄り駅まで押しかけてきたことが何度かあった。留守にしていると30分おき位に電話をしてきて、自分の交際についてはあまり立ち入らなかった母親までもが「どんな人なの?」と心配するほどだった。

自分は土、日に行くことがほとんどだったが、ついであって学校帰りに寄った際、制服を見てOが「〇〇高校だったの?何年?」と聞いてきた。何でも、Mという同じ高校の1年上の上級生が、時々手伝いに来るといふ。ようやく会えたMは小柄でメガネをかけ、初対面のときは不愛想だったが親切ない人だった。同窓ということもあり、いろいろなことを教えてくれ何かとお世話になった。パンフについてのもろもろは、経験やコレクター連中とのやり取りなどから次第に身につけていったが、一番多くのことを学ん

だのはMからだった。コーナーで知り合った後述するIと自宅にも招かれたこともあり、膨大なコレクションと豊富な知識に感嘆した。これから旧作のパンフを集めようという方の参考のために、以下に概略を記す。

まず、最も価値のあるのは、ロードショー時の館名入りのもの。終戦直後の昭和20年代は唯一縦長の旧「スバル座」、「日比谷映画」旧「東劇」など館毎にレイアウトが決まっていて下部に大きく館名が入り、同じレイアウトで館名のないものは少なくとも見たことがなかった(売れ残って館名を消してあるものはたまにあった)。これらの中には、ゲーリー・クーパー、ビング・クロスビーら当時のトップスターの顔がデカデカ出ているだけで、題名さえないものもあって時代を感じさせる。ただ、次回の予告などの他、館内の案内や座席表、万一の際の避難経路に気分が悪くなった場合は医薬品の用意が



「松竹セントラル」でリバイバルされた「赤い河」(47)。穴あけは絶対やってはならない保管方法の典型で百害あって一利なし!お陰で安価で買えたが…。



「刑事マディガン」(68)のロードショー時のパンフ。主役のリチャード・ウィドマークの右手の拳銃も、他の場面のを切り貼りしている。

映画パンフレット漂流記(2)

どがモノクロで、映画館の入り口やロビーなどによく飾られていた。中古だけに使い回されて四隅は画鋏の跡だらけだったが大満足だった。25枚組1500円でユニバーサル映画のロゴの入った厚手の立派な封筒に入れてくれ、今も大事に持っている。パラマウントの「大平原」(39)のフィルム缶があったので、ついでに上映期間などについて聞いてみると、5年を過ぎたものは一切上映できないという。本国からそれをどうやって確認するのかとの質問には、フィルムを返すがジャンクするという。ジャンクの方法は薬品に漬けるそうで、思わずもったいないですぞねといったら、苦笑いしていた。パ社の「大平原」があったのは、この少し後にユニバーサルとパラマウントが日本も含めた本国以外での配給を1本化するためCICとなったことと関係があったのかもしれない。

1970年はひとつの切れ目で、さまざまな面で60年代との変化を感じた。自分も71年に高校生となり、生活環境や行動地域が大きく変わった。「西口パレス」など100円の名画座は消えていったが、「新宿ローヤル」、渋谷の「全線座」、高田馬場の「パール座」などが通学路にあったので学校帰りによく立ち寄り、「大塚名画座」、池袋の「文芸座」、三原橋の「地球座」などにも時折足を伸ばした。ファンタジー・コーナーでの中古パンフあさはこの頃からで、だんだん過熱してトラブルも散見された。くだんの得体の知れない面々の中のIは高校のクラスメイトの小学校時代の同級生だったことも判明しすぐに親しくなった。言葉遣いも正しくやはり周囲の連中とは距離を置いていたが、そのからとんでもない話を聞

いた。ここで知り合った者同士の間で盗難が発生したというのだ。かなりのコレクターAの自宅へEを招いた後に、コレクションの一部が紛失したのだそうだ。値打ち物も含まれ、数もけっして少なくはなかったようだ。そんな状況から訪問時に持ち出したのではなく、外部から侵入し易い間取りだったので後日に盗られたらしいという。いやはや。どの分野でもコレクターとは恐ろしいものだと痛感した。盗難事件の話はまたたく間に広がり、確証があるわけではなかったがEが犯人と目され、みなEを敬遠するようになった。AとEが出くわすと険悪な空気が流れ、互いにけっして口をきかなくなった。そんなことがしばらく続いたある日曜の夕方、いつものメンバーの5、6人がほとんど揃ったところで、Oがお茶でも飲みに行こうと言った。事件のことを知ってか知らずか、最近の雰囲気の変化に気づき打開したかったのかもしれない。客と店の関係とはいえ、それなりの時間を共有していると親近感も沸き、ちょっと兄貴風も吹かしたかったようだ。近くの帝国ホテルと聞いてビビったのか、Gパンだからと帰ろうとした例のしつこ

いKも、Oが「今は大丈夫だよ。おごるから」というと急に笑顔になって付いてきた。

Oが言う通りホテルのドレスコードはかなり廃れていたが、それでも一流ホテルの喫茶室に場違いな一団はやはりかなり浮いていた。席に案内されるとOを中心に自然と周りを囲むように着席し、AとEは一番離れて座った。周囲の視線を意識しながらも、映画やパンフの話などに夢中になるうちに、いつものペースになってきた。プライベートな話も出て大方が大学生らしいことが判明したが、Kだけは巧みに話をそらしてついに「正体」を明かさなかった。年齢が20歳前後と思われる以外は、見当もつかなかった。出くわす時間帯からして、社会人ではなさそうだ。かといって学生という感じもまったくなかった。連絡先を交換した際も、電話をもらうなら夜の7時から8時の間だけでそれ以外は絶対避けてくれと言った。一度だけ頼まれた件があって電話をすると、母親くらいと思いき女性が取り次いでくれたが、当たりも良く不都合な様子は感じられなかった。新宿の方に住んでいるらしいということ以外は、詳しい住所や職業などの一切が不明なままだった。ここまで自分のことを秘密裡にする人間も珍しいが、ヤバい匂いはしなかったのでそのままにしておいた。

そんなKもEには批判的で、警戒している様子がありありだった。その後もファンタジー・コーナーには、いろいろな人間が現れることになる。(次号に続く)



あの日、未来は明るかった。――
懐かしくもほっこりと、現代人の郷愁を誘う
「昭和30年代のマスカルチャー」

大田区大森を中心に、高度成長期の東京がいまきこえます。

ケーシー先生や力山に憧れ、アトムや鉄人に熱中し、カラーテレビが、クーラーが、ハンバーガーショップが身近に押し寄せてきた夢いっぱい少年時代。一方で、周りを見回せば捨てられたガム、連続する鉄道大事故、暴走タクシー。牛の銘柄の豚肉100%コンビーフや産しないアイスも売られ、食の安全はそっちのけ状態。
*「古き良き昭和」ばかりではない、リアルな日本の高度成長期を描いた、軽快なエッセー。

付録ムービー

- テレビ・芸能
- テレビの青春時代
- 教科書だったアメリカのドラマ
- プロレスと力山
- 実写版「鉄腕アトム」と「鉄人28号」
- コマソンの女王 橋トシエ
- 電気店の裏うつ
- カラーテレビ狂想曲
- リモコンテレビが欲しい!
- クーラーをつけたまま寝ると死ぬ?
- ホラロイ力スマ
- 可愛いアップペイトカメラ
- 8ミリフィルム

食

- モカカレーと「少年ジェット」
- アメリカンドッグ事始め+レモネード
- ハンバーガー-歴史
- スナックティは珍める物?
- 味のワルミン
- 私塾子屋とお菓子屋のあったころ
- 喫茶店+ジュース店
- 製作! 湯水型ジュース自販機
- 10円アイスクリームが花盛り
- 消えたガムつれづれ
- ホビー
- 腕の手帳
- 2台車とトラック
- 服玉鉄道の玉座

26. 早くマデラ

- 黒かった金銀製のモルガン
- ブラマ子と御神時代
- 社会・文化
- ケネディの時代
- 外車運送
- 自動車は結構?
- サンディッチのような車の三角
- デパートはワンダーランド!
- 町の映画館
- 折たたみ紙コップ
- 月刊マンガ誌と付録
- ペラペラのソノシート

本書DVD版は、月刊FDI編集部にて
本文：108ページ / 映像：2分23秒 2012年9月 ミリアムワード(株) 発行
価格：1,980円(税込)
株式会社ユニワールド 東京都世田谷区上北沢3-17-5 杉本ビル1F

著者紹介

千葉豹一郎

作家・評論家。著書に「法律社会の歩き方」(丸善)「スクリーンを横切った猫たち」(ワイズ出版)(電子版はアドレナライズ)「昭和30年代の備忘録(電子版)」(ユニワールド)「猫と映画人(電子版)」(アドレナライズ)等の他、「東京新聞」「ミステリマガジン」(早川書房)「猫生活」(緑書房)等をはじめ連載も多数。独特の切り口で草創期からの外画ドラマの研究や紹介にも力を入れている。